

巻頭言

「夏の歳時記」

理事長 新谷友良

新型コロナウイルス感染防止で外出自粛が続く中、厚手の本を読む気力が沸き上がって来ませんでした。アマゾンのkindleで角川書店編集の「俳句歳時記」第5版をダウンロードして、拾い読みをする日が続きました。文庫版では、春・夏・秋・冬・新年の5冊に分冊されていますが、kindleは合本でダウンロードできて、持ち運びが楽です。

「俳句歳時記」第5版に収録されている季語は2650、その中で夏の季語が最も多く745となっています。夏の季語の代表は「朝顔」と思い込み、気に入った句を手持ちの本で探しましたが見当たらず、ホームページを検索してやっと気に入った句を見つけました。

「七月七日入谷の朝顔とどきたる」（細見綾子）。

今年の入谷鬼子母神の朝顔市は新型コロナウイルスの感染拡大で、中止になりました。東日本大震災のとき以来、10年ぶりの中止です。当てもなく、どこからか宅急便で届くことを期待しましたが、細見綾子の句のような出来事はありませんでした。

俳句をかじった人は先刻ご承知のように、朝顔は夏の季語ではなく、秋の季語になっています。歳時記は立秋（8月7日頃）から立冬の前日までを「秋」としています。しかし、山口青邨の「山下りて朝顔涼し京の町」の句のように、朝顔の花を見て感じる涼しさは、真夏の感覚です。

朝顔の花にはさまざまな色があります。最近では4色や6色を一鉢にまとめた行燈仕立てが人気で、白や赤に混ざって団十郎の淡い色が特に好まれていると聞きました。

朝顔市でも単色の鉢はあまり見当たらず、好きな色合いの朝顔が欲しければ、種か苗から育てる必要があります。

そのような多くの色の中で、俳人の好みは紺・藍といった色調に傾斜している印象があります。「この頃の薺（あさがお）藍に定まりぬ」（正岡子規）、「好悪さだまりて朝顔の紺ひとつ」（飯田龍太）。夏の暑気の中で、水が打たれた白や赤の花に感じる涼しさと、紺や藍の花の醸し出す涼しさとは少し違ったところを感じます。彼らの審美眼は、盛夏に忍び寄っている秋の涼気を、いち早く紺や藍のなかに捉えているのかもしれない。そのような朝顔の句をもう一つ、

「朝顔の紺のかなたの月日かな」（石田波郷）